

マタイによる福音書 16:5-12

復活節第五主日を迎えました。そこで、今日が連休最終日ということもあって、大分前のことと思い出したのですが、それは、教会の礼拝に出席するため、朝、駅に向かっていたときのことです。中学校の同級生にバッタリと出会って、どこに行くのかと尋ねられたのですが、そこで礼拝に出席するためこれから教会に行くところだとそう説明したところ、しきりに感心されたということがありました。ただ、その感心のされ方には、二つの意味が込められていたように思います。一つは、聖なるものに関わることへの敬意です。そして、もう一つは、物好きだねといった具合の好奇の目です。このように、かつて教会に行くということは、私に限らず、世間からの尊敬と好奇な目で見られることがあったようと思うのです。ところが、今はどうでしょうか。敬意を持って受け止められることが以前と比べて格段に少なくなっているように思うのです。それは、一つには、人と人との繋がりがそれだけ希薄になってきたからです。つまり、想像がつかないということです。けれども、このことは同時に、教会に行くということが好奇の目にさらされることも少なくなってきたということです。ですから、見方を変えれば、誰に気がねするでもなく、自由にのびのびと教会に行けるようになったということです。それゆえ、このことは、私たちにとっては大変ありがたいことではあるのですが、けれども、果たしてそれでいいのでしょうか。

一つの選び、一つを信じるということは、周囲の敬意と好奇の目に晒されることであり、それゆえ、私たちを多少なりとも緊張させ、また、萎縮させる作用があります。けれども、こうした社会の様々な眼差しの中で養われていたものが私たちの信仰でもありました。それは、私たちの信仰は「それでも」というところにしっかりと立ち続けてこそそのものだからです。ところが、今はどうでしょうか。私たちにとっての思い煩いの一つの種であった社会の好奇な目はかつてのように確かに気にする必要はなく、そう意味で私たちはこの一つの煩わしさから解放されたのは間違いません。けれども、この、何ものをも気にしない、いや、気にならない、気にする必要も

ないということが、聖書が語るところの自由を約束するものなのでしょうか。聖書の語る自由とは、世の風向き次第で感じたり感じなかったりするものではありません。神様を信じる私たちにとっては、常に絶えずどんな時にも約束されているもので、従って、社会的制約を受けずに礼拝に出席できる今のこの状況を、私たちがもし自由を手にしたと勘違いしたなら、その自由を謳歌した先に、いったい一体何が待っていると言えるのでしょうか。

一つを選び、一つを信じるということは、私たちには守るべきものがあるということです。そして、この守るべきものとは、信仰であり、主の日の礼拝であり、こうして主の教会に連なり続けることです。ですから、同じ信仰をもった者同士の繋がりの強さは、この、守るべきものを守るという共通の基盤があるからです。従って、教会というコミュニティの独特の強さは、この共通の基盤をより多くの人々と共有しているからで、そして、その強さとは、内に籠もるような他を寄せ付けないような強さではありません。イエス様がそうであるように、私たちの強さとは外に向かって現されるものであり、それが私たちキリスト教会でもあるのです。ですから、私が教会に行っているということをしきりに感心されたのは、そこに先人たちの、この守るべきものを守り続けた営み、信仰をもって外に向かって生きることの力強さ、そういうものがあったからです。従って、私個人が友人から「へー」と関心されたわけではありません。「へー」というこの一言の後に、友人が「ふーん」と言ったように、「お前はどうなんだい」という問いかけを、多くの先人たちが真面目に受け止めてこられたからです。

ただ、私たちに守るべきものがあるということは、世間の反応が「へー」でも、「ふーん」でも、それはどちらでもいいことです。それは、守るべきものがあるということが人の顔色を伺うようなものではないからです。従って、そういう意味で、世の中とは一線を画すものであって、もし世間とのこうした境界線がなければ、これは、いかなる信仰についてもそうなのですが、境界線が不明確なままの信仰は、その

生きる力をたちまちのうちに失うことにもなるのです。ですから、私たちが先代から受け継いできた信仰の強さとは、境界線を明確にしつつ、その上で狭い所に閉じ籠もるのではなく、外に出て行く中で現されていったものだということです。歴史に埋没することなく、今まで続いてきたのはそれゆえのことであり、それが守るべきものを守るべきものとして大切に大切に守り続けるということでもあるのです。

そして、それが私たちに許されたのは、私たちがそうすることに何の障害もなく、また何の軋轢もなく、平々凡々と過ごせたからではありません。世の荒波に飲み込まれず、長く続けてきた信仰というものは押し並べてすべてそうなのですが、それは、様々な障害、軋轢としっかりと対峙することができたからです。それも、力尽くではねのけ、蹴散らしてきたからではなく、耐え忍ぶがゆえの強さであり、しかも、こうした試練を互いに分かち合い、励まし合い続けたところに、私たちの信仰の強さがあるのです。それゆえ、嵐が通り過ぎるまでの間に私たちの思うことは、自分が強いということではありません。その弱さであり、貧しさであり、不完全さです。パウロが「わたしは弱さ、侮辱、窮屈、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。」と言っているのは決して強がってのことではありません。弱さの中にあって私たちを支えるものが私たちの神様であり、イエス様である、この、守るべきものを守り続ける姿勢を、私たちはパウロのその姿から学ぶことにもなるのです。

そこで考えたいことは、ここでイエス様が「ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種」と言われていることです。それは、ファリサイ派の人々にも、サドカイ派の人々にも、私たちと同じように、それぞれがそれぞれに守るべきもの、守らなければならぬものがあったからです。ただ、守るべきものを大切にしていたその彼らが、心から互いに信頼し合っていたわけではありません。それぞれの守るべきものを巡って、互いに反目し合っていたのが日頃からの彼らの姿であったからです。ところが、その彼らが手を結び、イエス様のことを軌を一にして攻撃している。それは、彼らを互いに結びつけたものがイエス様憎しというこの一点であったからです。従って、このイエス様憎しという彼らの共通の基盤が

いかに的外れであったのか、ユダヤ社会におけるその道の権威であった彼らが、やがてその馬脚を現すことになった理由がよく分かる気がします。それは、神様の御心を知る、分かるということがイエス様を否定するところから始まるものではなく、神の子、救い主として肯定するところから始まるものだからです。そして、このイエス様を肯定し、受け入れていたのがイエス様の弟子たちであります。けれども、そうであればこそ、また思うのです。イエス様を救い主として肯定するということはいったいどういうことなのか、ということです。

前回の説教の際に申し上げたことは、イエス様がユダヤという枠組みの外に出て行って御言葉を宣べ伝えたということでありました。そこで、今日の箇所の最初のところを見て見ますと、そこには、「弟子たちは向こう岸に行つたが、パンを持ってくるのを忘れていた」とあるのです。このことから、ここでのことがガリラヤ湖のあっち側ではなく、こちら側に戻ってきてのことだと推察されるのですが、それゆえ、ホームグランドに戻ってきた弟子たちは、さぞや我が家に戻ったような安心感に包まれていたに違いないとも思うのです。しかし、そう思いきや、どうやらそうではないようです。この直後で、一行がフィリポ・カイサリア地方に行ったとあることから、依然として外の世界にあることが推測されるからです。ただ、イエス様一行のいるところがアウェーなのか、それともホームなのか、今日の御言葉を見ていく限り、よく分からないのですが、しかし、内か外かは兎も角も、一つはっきりしていることがあります。それは、ここ数日来にあった大きな出来事、イエス様のその言葉が弟子たちの心には、しっかりと届いていなかつたということです。

イエス様がここで「パン五つを五千人に分けたとき、残りをいく籠に集めたか。また、パン七つを四千に分けたときは、残りをいく籠に集めたか」と畳みかけるように弟子たちに尋ねたのですが、それは、内でも外でも、イエス様の力強さを深く知られたのがイエス様の弟子たちであったからです。ですから、生きていく中での不安材料がいくらあったとしても、弟子たちは安心していいし、安心できたはずなのです。ところが、その弟子たちが不安を取り除くことができずにいた。そして、弟子たちが不安に駆られたのは、イエス様のことを否

定しているからではありません。むしろ、その反対です。「ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種に注意しなさい」というこの一言を聞いて、「これは、パンを持ってこなかったからだ」と、弟子たちがすぐに反省しているところに、イエス様を信じ、信頼する弟子たちの姿を見ることができるからです。ところが、その弟子たちに向かってイエス様は何と仰ったのか。それは、「信仰薄い者たちよ。なぜ、パンを持っていないことを論じ合っているのか。まだ分からぬのか。覚えていないのか。・・・パンについていったのではないことが、どうして分からぬのか」というこの厳しい言葉であったのです。

ところで、「あっ、しまった」と思う物事の発想は私たちにもよくあることですが、この点について今日の御言葉から分かることは、私たちがイエス様を信じ信頼するということが、イエス様のことを見下し、見下げることでもなく、その反対に、顔色を伺って、イエス様の思いに何としても答えようすることでもないということです。つまり、見下げることがダメなのは当然のこととして、イエス様の御心を先に先に回って忖度することをもイエス様は喜ばれないということです。それは、イエス様の仰った「ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種によく注意しなさい」というこの言葉を聞いた弟子たちが、すぐさま「パンを持ってこなかったからだ」と、イエス様の言葉の先を考えてしまったように、先に先に回ってイエス様の意に応えようとすることは、イエス様を肯定しつつも、イエス様のことを頼りにしていないことでもあるからです。つまり、自らの力に頼り、それを誇示使用しているに他ならないということです。それゆえ、見下すことも忖度することも、自分というものを基準にイエス様を見ている限り、その根っ子はどちらも同じだということです。従って、イエス様への忖度は、それがいかにイエス様のことを肯定するものであったとしても、結果としては、イエス様のことを否定するファリサイ派、サドカイ派の人々の発想と同じ臭いを発することになるのです。なぜなら、持っていないことをイエス様が責めたと理解したところに、信じるということを自分のたちの理解可能な範囲、この世の道理で推し量ろうとするファリサイ派、サドカイ派の人々の同じ姿を見ることができるからです。

イエス様が信じ信頼するということの中

で言われたことは、一度あることは二度ある、二度あることは三度あると、イエス様を信じ信頼することのその確かさがありました。イエス様が、ここでイエス様が五千人、四千人の人たちが食べて満足したと、かつてご自分がなさったことを繰り返し仰っているのは、イエス様と共にいるがゆえに、必要は必ず満たされる、与えられるということだからです。ところが、弟子たちはこのイエス様のお言葉に安心することが出来なかつたのです。このことはつまり、弟子たちが持っていないことを責められていると感じたのは、弟子たちの頼りにしているものがイエス様ではなく、自分たちがいかに多くを持っているか、どれほどの能力があるか、この点を生きる上での基盤としていたということです。ですから、図らずも明らかにされたことは、その不信仰、信仰の薄さであります、それゆえ、そのことへの気づきが与えられたのがここでの弟子たちでもあったのです。イエス様が

「ファリサイ派、サドカイ派の人々のパン種に注意しなさい」と繰り返し仰ることで、弟子たちは、注意すべきことがパン種ではなく、その教えであると悟ったのはそれゆえのことでもあります、ですから、それが分かって、きっと弟子たちもさぞホッとしたことでしょう。御言葉が「悟った」と語っているということはつまり、イエス様の仰っていることの意味が本当に分かったということだからです。ですから、このことはまた、私たちに希望を与えます。イエス様の仰ることが、言葉の意味として、私たちにも理解可能なものであることを御言葉が伝えてくれているからです。そして、この分かる、悟るということは、すなわち、ファリサイ派、サドカイ派の教えを拒否する、背を向けるということでもありますが、ただ、そこで気をつけなければならないことは、それが分かったからといって、それですべてが終わるものではないということです。

それが本当の意味で問われるのは、どういう場所、どういう時なのでしょうか。イエス様を拒むことも受け入れることも、それが自分自身の思い、考えにおもねるものであれば、それは、ここでイエス様の仰る「ファリサイ派、サドカイ派の人々のパン種」と同じです。忖度と見下すこととがコインの裏表であるように、自分の思いや考えに拘り、その正しさを論じ合うことは、どちらも神様とイエス様を利用するに他ならないからです。だから、イエス様は彼ら

のパン種に注意するようにと促したのですが、そこで私たちが考えたいことは、では、自分の力にすぐに頼ろうとする私たちは、イエス様を信じるに値しない者なのかなということです。そして、そこで私たちがすぐに思いつくことは、YES、信じるに値しないということです。それは、手放しでイエス様のことを信じ信頼するということが、ある意味で私たちに馬鹿になれ、愚かになれといっているに等しいことだからです。けれども、イエス様はそれを私たちに求めている、では、その私たち、弟子たちにイエス様がそれを求めておられるということはどういう意味を持っているのでしょうか。

私たちが先週学んだことは「ヨナのしるし」以外、確たるものは何もないということでした。ただ、このヨナのしるしと言われているものは、私たちが喉から手が出るくらい欲しいものではありません。暗闇の中に置かれることであり、希望を失い、絶望と死を予感させるものもあるからです。つまり、ヨナのしるしと言われていることと向き合う私たちとは、自分自身が壊れ、自分自身を見失う経験をさせられるということなのです。つまりは、自らの弱さ、貧しさ、不完全性を徹底的に味わい知らされる時、そのような場に置かれるということです。ですから、それを好んで受け入れることのできる者はおりません。それゆえ、自分の力量に合わせて、痛手を被らない範囲で様々なことを思い巡らせるのですが、その姿こそが、自分が何をどれだけ持っているのかというところでイエス様のお気持ちを忖度する弟子たちであります。それは、傷つきたくないから、そして、その姿をイエス様は「信仰薄き者よ」と仰るのですが、では、そうイエス様に言われることは、私たちにとって恥ずかしく、耐えがたいことなのでしょうか。それだけではありません。ファリサイ派、サドカイ派の人々がイエス様のことを非難したように、イエス様を否定的に受け止める人々は、恥ずかしく、耐えがたい存在であるがゆえに、決して赦されることのない人々なのでしょうか。彼らと私たちとを区別するものは一体何なのでしょうか。

イエス様の十字架と復活の出来事が明らかにしたこととは、私たちも、私たちが赦しがたいと思うその人々も、同じようにイエス様の十字架の前に立つ者であったということです。つまりは、それぞれが同じ出来事を経験したということです。けれども、

十字架を耐え忍び、復活の希望へと導かれた私たちは、恥を知り、耐え難きを耐え、その繰り返しの中でイエス様の思い、神様の御心を知ったのです。ただし、それにも関わらず、同じことが繰り返される、このことはつまり、ここでの弟子たちがそうであったように、私たちがこうして信仰を持って生きるということの中には、必ず分からぬところがあり、残された課題が必ずどこかにあるということです。まだから、この分からぬところが必ず残されているというところに安心できない、私たちが自分の力で何とか補おうとしてしまうのはそのためです。けれども、ヨナのしるしを経験することにおいては、そんなちっぽけな力は何の足しにもなりません。けれども、そうであるからこそ、そこで私たちは信仰の奥深さを知るのです。

分からぬところ、手の届かないところがあることを私たちが知ることは、私たちの信仰においてはとても大切なことなのです。それは、自分の見たいもの、やりたいことだけをやっていったその先に待っているのは、人を責め、自分を罰しようとする思い込みでしかないからです。そして、この思い込みこそが「ファリサイ派、サドカイ派のパン種」と言われているものであり、そして、他者と自分とを自分の価値観に従って線を引こうとしたのがファリサイは、サドカイ派の人々であります。そして、そういう気持ちは私たちの中にもあります。ただ、それに気づくことは、自らの弱さ、貧しさ、不完全さを深く知らされることでもあるのです。そして、この私たちの理解など何一つ及ばない暗闇の中にじっと留まり、立ち続けることを求めるのがイエス様でもあるのです。しかし、まさに、ここから生み出されるものが、守るべきものを守り通す私たちの信仰でもあるのです。それは、分からぬこと、思い通りにならないこと、その中で私たちに約束されているものがイエス様との出会いであり、そして、私たちに繰り返し繰り返し約束されているこの聖なるお方との出会いが、私たちがこうして生きているということの確かさを私たちに知らしめることにもなるからです。主、我らと共にいます、この信仰をどんな時にも、どんな場所でも思い起こしたいと思います。祈りましょう。